

● 教室(診療科)の特色 ●

優秀な眼科臨床医の育成を第一の目標に掲げ、卒前および卒後臨床教育に力を入れています。具体的にはウエットラボによる手術教育、各専門領域の指導医による講義、カンファレンスの充実、専門医取得を前提とした学会発表・論文執筆、大学院進学による学位取得の推進等が挙げられます。現在、当教室ではすべての眼科専門領域(網膜硝子体、神経眼科、斜視弱視、緑内障、角膜、ぶどう膜、涙道など)があり、各領域をバランスよく発展させられるようサポートしています。一般に、情報の80%は目から入るといわれています。“目”は患者さんのquality of vision (QOV)やADLに直結しますし、眼科の所見は全身状態を反映することが多いため、他の診療科との連携や協力を大切に、診療を行っていきたくと考えています。



喜田 照代(きだ てるよ)教授(科長)

■専門分野

メディカル網膜、網膜硝子体疾患、眼循環

■学歴

1996年 3月 大阪医科大学卒業、同年5月大阪医科大学眼科学教室入局
 2002年 3月 大阪医科大学大学院修了(医学博士)、同年4月淀川キリスト教病院眼科
 2005年 5月 米国カリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)眼科フェロー
 2007年 6月 淀川キリスト教病院眼科副医長
 2009年 4月 市立枚方市民病院眼科副部長
 2011年 4月 大阪医科大学講師(准)
 2014年10月 大阪医科大学眼科講師
 2020年 4月 大阪医科大学眼科診療准教授
 2021年 4月 大阪医科大学薬科大学医学部感覚器機能形態医学講座 眼科学教室教授

■主な学会/専門医資格

日本眼科学会専門医・指導医、医学教育指導医、眼科PDT認定医、日本眼循環学会、日本網膜硝子体学会、日本糖尿病眼学会、The Association for Research in Vision and Ophthalmology (ARVO)、日本緑内障学会
 日本眼科学会専門医制度卒後研修委員会専門医委員

■研究課題

網膜静脈閉塞症や糖尿病黄斑浮腫、加齢黄斑変性の病態解明・新規治療の開発

● 教室(診療科)の概要・特徴 ●

当教室は、2021年4月より喜田照代教授が就任し、新たなスタートを切りました。現在のスタッフは、喜田照代教授、奥 英弘専門教授、小嶋祥太特務教授(三島南病院)、小林崇俊講師、佐藤孝樹講師以下、講師(准)5名、助教3名、助教(准)1名、大学院生4名、レジデント5名からなり、関連病院出向医を含めた現役教室員は100名、同門のOBを含め同窓会員は340名を超え、眼科学教室としては日本でも屈指の規模です。

教室の特徴としては、前述した教育システムの充実や各専門グループにおける経験豊富なスタッフに加えて、豊富な関連病院(現在33施設)、海外・国内留学の推進などが挙げられます。眼科全体としての総手術件数は毎年約2000件で、うち硝子体手術が約500件となっています。また、研究においては、多施設臨床研究だけでなく、基礎の教室の先生方と連携して基礎研究にも力を入れており、国内あるいは海外の施設と積極的に共同研究を行っています。

● 教室(診療科)指導医・上級医 ●

氏名(職掌)	専門医	参加学会
奥 英弘(専門教授)	神経眼科	日本神経眼科学会理事、日本眼科学会、日本緑内障学会、日本眼薬理学会、日本視覚電気生理学会
小林崇俊(講師)	ぶどう膜	日本眼炎症学会、日本眼科学会
佐藤孝樹(講師)	網膜硝子体	日本網膜硝子体学会、日本眼科学会
田尻健介(講師(准))	角膜	日本角膜学会、日本眼科学会
戸成匡宏(講師(准))	神経眼科、斜視弱視、ロービジョン	日本弱視斜視学会、日本神経眼科学会、日本小児眼科学会、日本眼科学会、日本眼科手術学会
他、講師(准)3名、助教3名、助教(准)1名		

- 連絡先：大阪医科薬科大学眼科学教室 TEL:072-683-1221 (内線2354 眼科医局)
- ホームページ：<https://www.ompu.ac.jp/u-deps/opt/index.html>

眼科専門研修プログラムの特徴

当教室は、年間手術件数2000件と、豊富な手術症例を有しています。外来診療においては、専門外来(網膜硝子体・黄斑、緑内障、角膜、神経、斜視弱視・小児、ぶどう膜、眼循環、涙道、コンタクトレンズ、ロービジョン、臨床視覚電気生理)を設置しており、眼科学全般に関して幅広い研修を受けることが可能です。

2018年4月から、新専門医制度が開始されました。本学眼科専門研修プログラムでは、4年間の研修期間中、最初の1年目を原則的に基幹施設である大阪医科薬科大学病院で研修を行います。細隙灯顕微鏡や眼底検査などの眼科検査の基本を習得すると同時に、外眼部手術や白内障手術を中心とした手術手技が習得できるように指導します。また、1年目の後半には実際に大学病院の外来診療を行ってもらい、多くの症例を経験できるようにしています。外来中には適宜上級医にコンサルトできる環境を整え、診療後には指導医とマンツーマンでカルテチェックを行います。眼科は他科と比較して、早い時期に実際の外来担当医や術者になれるのが特徴です。2年目以降は4府県に広がる22の専門研修連携施設で研修を行い、白内障手術を中心とした様々な手術の研鑽をさらに積んでいくことになります。これらの連携施設は、地域の中核病院であり、優秀な指導者を有する連携施設が豊富にあります。他大学と連携する病院も含んでおり、他大学とも大学の枠を超えて協働体制を敷いています。この多彩な現場を活かし、専門研修基幹施設だけでは経験が不足しがちな初期の一般的な疾患や眼科救急医療、各地域特有の医療事情など幅広く研修を行える場を提供しています。大学病院での最先端の専門的診療経験と地域中核病院での即戦力となる臨床経験によって、眼科専門医を育てることが当プログラムの特徴です。

眼科専門医取得について

4年間の専門研修プログラムを修了後に眼科専門医試験を受験することになります。当教室のスタッフ全員で協力しながら、教育に取り組んでおり、教育システムは非常に充実しています。超音波白内障手術教育のためウェットラボの常設や縫合練習用顕微鏡の医局内設置など、手術のスキルを向上させるための実践的な環境を充実させています。基本方針としては、できるだけ無駄を省いて限られた時間内で能率の良い研修ができるように配慮しています。毎年、当教室員は専門医試験で優秀な成績を挙げています。

カンファレンス

木曜日の午後6時からオープンカンファレンスが約1時間行われており、学会予行や大学スタッフによる各専門領域のアップデート、さらに他施設の先生を招聘して特別講演を行っています。これには医局内だけでなく、関連病院や同窓会の先生方も参加し、ディスカッションを行っています。Covid-19感染拡大後の開催形式はリモートを取り入れました。状況に応じてハイブリッド開催も併用しておりますので、参加しやすいと思います。

また、網膜、神経、斜視弱視、緑内障、角膜、など、各専門領域別のカンファレンスを定期的に行っています。これは各専門領域の専門指導医とレジデント・研修医の間で小規模単位で行うもので、専門的な知識から日常診療の小さな疑問点まで質問、相談しやすい場となっています。



手術トレーニング(ウェットラボ)風景



大阪医大眼科セミナー

後期研修医の週間スケジュール

月曜日	病棟にて患者診察、外来検査 網膜カンファレンス
火曜日	手術 病棟にて患者診察
水曜日	病棟回診、外来検査、病棟にて患者診察 各専門領域のカンファレンス
木曜日	病棟にて患者診察、外来検査 オープンカンファレンス
金曜日	教授回診 手術
土曜日	病棟にて患者診察

その他、火曜、水曜、木曜の午後に月1回各領域別カンファレンス。



手術室



リサーチカンファレンス

大阪医科薬科大学眼科セミナー

年に2回、教室が主催するセミナーを行っています。春は毎回テーマを決めて(高槻眼疾患フォーラム)、秋は同窓会とのジョイントで行っています。毎回150~200名の参加者があり、非常に勉強になるセミナーとして好評です。

学会活動

春の日本眼科学会、ARVO(米国)、夏のヨーロッパ眼科学会、国際緑内障カンファレンス、秋の日本臨床眼科学会、AAO(米国)、冬の日本眼科手術学会をはじめとして、各専門部会など学会は数多くあり、各会に積極的に演題を出しています。

毎年、当教室の多くの先生が全国学会のシンポジストや教育講演者選ばれて活躍しています。

休暇について

当教室では、教授からレジデントまで全員が一律に年間2週間の休暇がとれるようにしています。

関連病院

関連病院は、現在常勤医を派遣している施設が31、非常勤も含めると40施設以上あります。基本的に教室での1年間の後期研修を終えて最初に赴任する病院は、スタッフが充実しており十分な教育が受けられる病院を選んでいきます。関連病院の中には北野病院、県立尼崎総合医療センターなど他大学との相乗りの病院もあります。全員が当教室からの派遣医で構成されている臨床研修指定病院としては、市立ひらかた病院、高槻赤十字病院、高槻病院、八尾徳州会総合病院、松原徳州会病院、北摂総合病院、済生会茨木病院、城山病院、第一東和会病院、市立芦屋病院、河内総合病院、南大阪病院、などがあります。

教室の運営方針

優秀な臨床医の育成、臨床に結びつく研究の推進を掲げており、常に明るく活気のある教室をつくらうとしています。上記以外にもさらに新たな試みが数多くでてくるものと考えられ、今後の教室の益々の発展が期待されます。

春の新人歓迎会、夏の医局旅行、秋の同窓会総会、冬の忘年会をはじめとして、ゴルフコンペなど盛り沢山の企画があり、開催してきましたが、Covid-19感染拡大の影響により中止しています。

女性医師の働きやすい環境作りについて

当教室は女性医師が多いのも特徴の一つですが、結婚、出産後も安心して仕事ができるように種々のシステムを作っています。まず、産休・育休は希望があれば合計で1年間とれるようにしています。産休・育休後は原則として常勤に復帰してもらうこととなりますが、子育てなどでどうしても常勤が続けられない教室員に対しては、『非常勤教室員』という身分を作り、可能な範囲で勤務してもらっています。また、今後は、復職支援、たとえば、産休・育休などで一線を離れていた教室員に対しての再教育システムをさらに充実させる予定です。



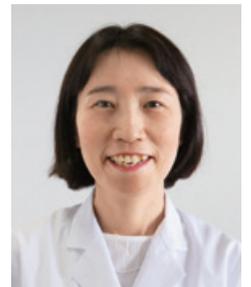
病棟研修風景



集合写真(2022年4月21日)

喜田 照代教授からのひとこと

毎日健康で楽しく過ごすことが一番です。どなたでも、好きなことなら時間も忘れるぐらい集中できるように、好きな仕事にたどり着くのが理想です。当科では、網膜硝子体、神経眼科、ぶどう膜、角膜、緑内障、斜視弱視・小児、涙道など、いくつもの専門グループに分かれています。手術もできますし、基礎・臨床研究も可能ですので、入局してからも自分に合った道を選びやすいでしょう。わからないことは何でも遠慮なく聞いて下さい。ぜひ、私達と一緒に楽しく眼科の勉強をしましょう。



戸成 匡宏講師(准)(医局長)からのひとこと

眼球は小さい臓器ではありますが、数ある眼疾患すべてを一人の医師で対応するには限界があります。角膜・結膜、水晶体、網膜硝子体、緑内障、斜視弱視・神経眼科、ぶどう膜等に分類されますが、すべての領域をマスターするのは容易ではありません。それは各領域が大変奥が深いからです。当医局では、専門外来が充実している事が特徴だと思います。眼科一般の診断治療が出来るようになって頂いた上で専門外来にて勉強できる環境があります。医局の雰囲気もアットホームで、分からない症例の相談があればいつでも上級医に気軽に質問できるのも良い所だと思います。是非とも私たちと一緒に頑張っていきましょう。



先輩レジデントのコメント



● 泉谷 祥之 ●
2021年度レジデント
2022年4月より北野病院勤務

素晴らしい教育環境や
諸先生方の熱心なご指導に感謝

私は大阪医科薬科大学で2年間初期研修を行い、眼科に興味があったためそのうち約半年間を眼科で過ごしました。初期研修の頃から病棟患者を担当させていただき入院患者さんの診察や、外来見学、手術助手に入らせていただいたりと色々な経験をさせていただきました。後期研修が始まってからは4月から外来診療も担当させていただき、最初は慣れず困った症例などがあることも多かったですが、大阪医科薬科大学は様々な専門分野が揃っていますのでスタッフの先生に相談することもできますし、白内障など手術症例があれば執刀することもでき、手術後のフィードバックも丁寧にしていただけますので教育環境も素晴らしいと感じています。カンファレンスや講義なども定期的に行われ丁寧に熱心にご指導くださる先生ばかりで恵まれた環境で日々研鑽を積むことができることに感謝する日々です。



● 柚木 麻衣 ●
2021年度レジデント
2022年4月より近畿大学奈良病院勤務

早めに実践的な経験を積むことができる当医局の強み

私は大阪医科薬科大学病院で初期研修を行い、約1年眼科で過ごし御指導いただきました。元々学生の実習の時よりマイクロサージェリーに興味があり眼科を考えておりましたが、実際に研修して眼科という分野の奥深さと興味深さを実感し、専攻したいと考えるようになりました。

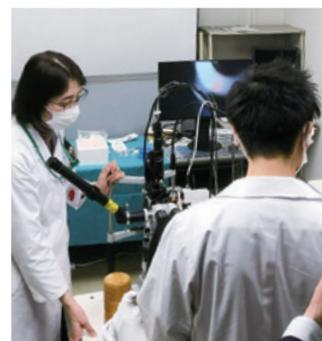
研修中は入院患者さんの診察やオペの助手、カンファレンスなど、知識を吸収できる充実した日々を過ごすことが出来ました。入院患者さんの疾患も多岐にわたりますので非常に勉強になります。

当医局はそれぞれの分野ごとに専門の先生がいらっしゃいますので、わからないことがあればすぐに相談できますし、親身になって丁寧に指導くださる先生が多く、恵まれた環境にいるなと強く実感しております。

初期研修での眼科研修具合にもよりますが、後期研修の早い段階から外来診療や手術の執刀も可能です。早めに実践的な経験を積むことができるのも当医局の強みと感じております。是非一度見学にいらしてください。



豚眼を用いた双眼倒像鏡レーザー実習



レーザーのトレーニング風景

大学院プログラムの特徴

研究と学位

毎月1回、大学院生を中心にリサーチカンファレンスを行っています。研究は将来的に何らかの形で臨床に貢献できる内容を選んでいます。基礎研究については、教室の研究室だけでなく大学の研究支援センターの共同機器も利用しながら、最新の分子・細胞生物学的手法を駆使して研究を行っています。研究の成果は毎年、日本眼科学会や米国のARVOで教員が発表しています。

現在の研究内容

①網膜静脈閉塞症の病態解明

網膜静脈閉塞症(RVO; retinal vein occlusion)は、日常よく遭遇する網膜血管疾患で、黄斑浮腫を合併すると強い視力障害をきたします。高血圧や脂質異常症の関与が示唆されていますが、発症メカニズムは未だ解明されていません。

最近、RVO眼の動静脈交叉部における静脈は閉塞しておらず管腔は保たれていること、さらに静脈自体がvasoactivityを有することが報告されました。そこで、静脈の血管攣縮や異常血管運動、それに伴う血流のdysregulationに着目し、新たな治療方法やRVO発症予防のアプローチを提唱したいと考えています。

②視神経傷害により生じる逆行性軸索変性に対する神経保護

視神経は中枢神経系に属し、再生は生じません。しかし軸索変性遅延マウスの存在からも、軸索変性に制御可能な過程の存在が示唆されます。また水チャネルであるaquaporin 4(AQP4)は視神経では主にアストロサイトに発現し、炎症反応と密接に関与しています。さらにタウオパチーを介した神経細胞死も生じています。さま

ざまな傷害過程の機序を明らかにし、神経保護につながる研究を目指しています。

③糖尿病黄斑浮腫におけるアクアポリン4の関与とその制御

糖尿病黄斑浮腫は、糖尿病網膜症の重症度を問わず発症し、QOV低下の原因となります。現在、抗VEGF薬硝子体注射が治療の主流ですが、再発するため反復投与が必要です。VEGF以外の関与の可能性としてアクアポリン4に着目し、大須賀翔講師(准)は、大学院で動物実験を行い、網膜浮腫とアクアポリン4の関与についての基礎研究で学位を取得しました。引き続き臨床では硝子体手術患者さんで採取した検体で本研究の検討を行っています。

④緑内障と眼血流に関する研究

我々の教室では従来より、緑内障、特に正常眼圧緑内障の眼血流について、臨床的・基礎的な検討を行って報告してきました。当教室の河本良輔講師(准)は、多くの緑内障手術を行う傍ら、当院緑内障患者さんを対象にレーザースペックルフローグラフィやOCTアンギオグラフィなどの装置を用いて視神経乳頭部の血流や血管密度の検討を行い報告しています。

⑤ぶどう膜炎に関する研究

ぶどう膜炎は、現在も約30%が原因不明で、視力・視野障害が進行して日常生活に支障が生じ、炎症が沈静化しても網膜血管の狭細化や視神経萎縮となり失明に至ります。そのため、長期にわたる視神経の神経保護や網脈絡膜の循環改善は、抗炎症治療とともにquality of visionを維持するために急務です。当教室の小林崇俊講師は長年にわたり本学でぶどう膜炎の専門外来に従事してきました。その臨床経験から「ぶどう膜炎の視神経萎縮に対する神経保護についての治療法の確立」という研究課題で科研費の基盤研究Cに採択され、大学院生とともに基礎研究を行っています。

奥 英弘専門教授からのひとこと

研究と臨床の両立は、困難であるという意見があります。しかし研究をやってみると臨床医としての視野が必ず広がります。実験的に視神経を傷害すると逆行性に軸索変性が進み、網膜神経節細胞が死滅します。この過程は、臨床でみられる様々な原因に由来する視神経萎縮に共通するものです。視神経や網膜では興味深い様々な現象がみられます。たとえば組織修復に働くマクロファージがTNF α やendothelin-1など神経障害性物質の産生源となっています。また網膜神経節細胞では、軸索の機能維持に重要なtauタンパクが蓄積し、神経変性疾患でみられるタウオパチーが細胞死に関与しています。このような理解は、疾患に対する理解を深化させます。研究と臨床の両立はいろいろとたいへんなことが多いのも事実ですが、思いがけない結果との出会いは、わくわくしますし、やりがいがあると考えています。当教室では研究志向がある先生方を大歓迎します。



小林 崇俊講師からのひとこと

眼科は臨床が主体の診療科ですが、基礎研究も非常に大きなウェイトを占めています。教室でも、網膜や神経眼科、緑内障等の各領域における基礎研究が行われ、学会において、また論文として情報発信されています。研究成果は、即座に臨床に応用されるわけではありませんが、現在の眼科の手術や治療法も、すべて基礎研究が端緒となり、その後発展、応用されたものであって、研究は眼科学の進歩のためには必要不可欠です。とはいえ、私も大学院生の時に初めて行った基礎実験では、当初は苦勞の連続で、これまでを振り返っても非常に大変な時期でした。しかし、だからこそ論文となったときの感動は忘れがたく、その時期に培われた考え方は現在でも生かされていると感じます。また、教室では基礎研究だけでなく、臨床研究や疫学研究など、臨床データに基づいた研究も盛んに行われています。臨床と研究の双方をバランスよく進めるには、眼科は最も適した診療科だと思います。

